

6 . 植物調査

6.1 調査項目

(1)植物相調査

植物相

貴重な植物種

(2)植生調査

植生調査（群落組成調査）

植生分布状況（現存植生図）

植生分布状況（ヒルギ類樹高区分図）

植生断面図

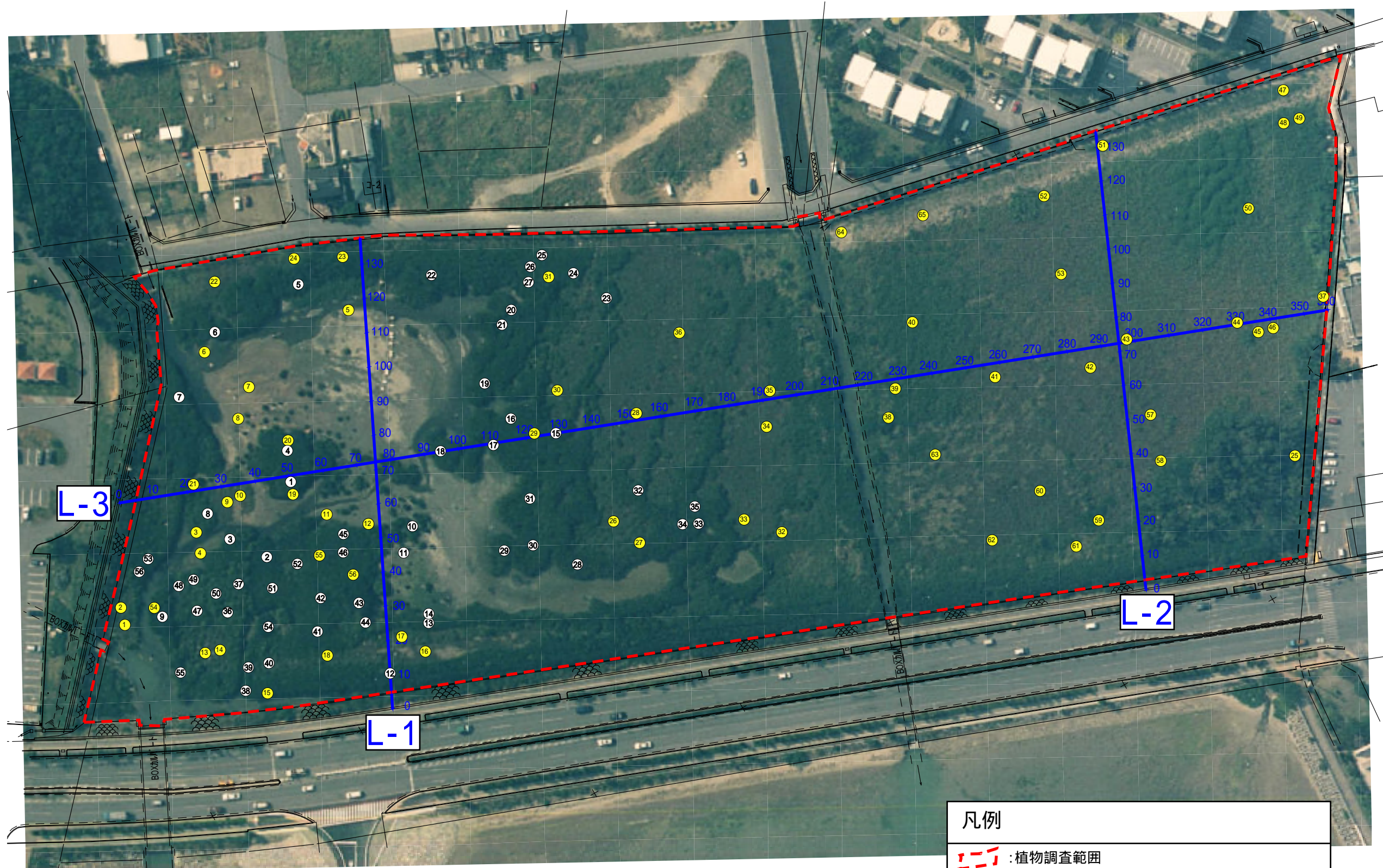
貴重な植生分布状況

6.2 調査時期

平成17年 8月12日、15～18日、24日、26日、30～31日

6.3 調査範囲

植物相調査範囲、植生調査地点、マングローブ樹高区分等調査地点、植生断面図調査ラインを図 6-1 に示した。



凡例

- : 植物調査範囲
- : 植生断面図調査ライン(L-1~3)
- : 植生調査地点(No.1~65)
内数字は調査地点番号を示す。
- : ヒルギ類樹高調査地点(St.1~56)
内数字は調査地点番号を表す。

出典：地形図(平成13年:国土地理院)
空中写真(平成15年:国土地理院)

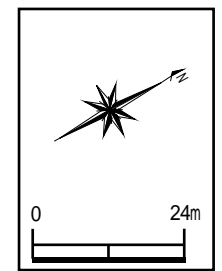


図6-1 植物調査地点図(植物相調査、植生調査、ヒルギ類樹高区分等調査、植生断面図調査)

6.4 調査方法

(1) 植生調査

植生調査（群落組成調査）

植生調査は、植物社会学的調査法(Braun-Blanquet:1964)に基づき以下のとおり実施した。

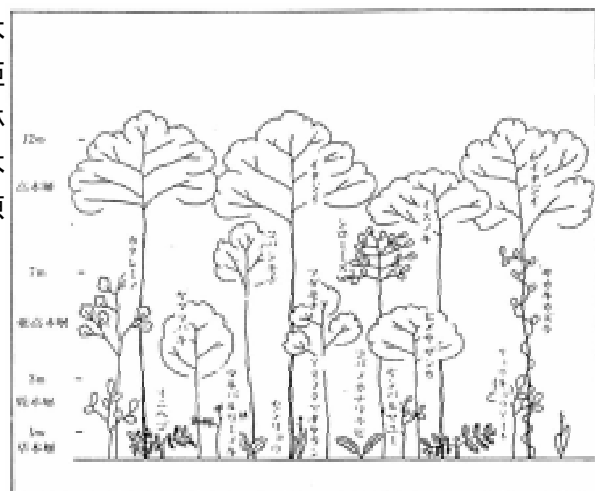
a. 調査区の設定

植生調査を対象とする植生内に調査方形枠を設置した。これら、調査区の大きさは、対象とする群落により異なり 最小面積法に基づいて決定した。また、概略的な決定の仕方として、群落の優占種の高さを1辺とし正方形とする方法があり、この方法は種類数の多い複雑な群落でなければ適用可能である。

最小面積法とは、一般的に調査する面積が広くなるほど出現種類数は増加し、ある面積まで広くなるとその値は一定となる。これを種数-面積曲線であらわし、その変曲点から求められた面積を調査面積とする方法である。

b. 階層構造の区分

方形枠内の植生型によって、高木林は階層構造を4階層の高木層・亜高木層・低木層・草本層、亜高木林は亜高木層・低木層・草本層、低木林は低木層・草本層の2階層、草原は草本層の1階層に区別した。



層構造区分(高木林の場合:4階層)

c. リストの作成

各階層毎に植物のリスト（群落組成表）を作成した。

d. 被度と群度の測定

各階層の出現種毎に被度と群度の測定を行った。被度と群度の基準は下表に示した。

なお、被度と群度の測定方法は、調査地点（方形区）内で、ある出現種が方形区内の面積の1/4(25%)以上～1/2(50%)以下を占有する場合に「被度：3」、方形区内の群がりの状態が大きな斑を形成あるいはまだら状の場合に「群度：3」となり、「3・3」と記録する。また、個体数・植被率ともに少ない場合は「+」と記録した。

被度と群度の基準表

(被度) = 各植物の方形区内での広がりの状態
 被度：5 = 被度が 3/4以上を優占する。
 被度：4 = 被度が 1/2以上～3/4以下を占有する。
 被度：3 = 被度が 1/4以上～1/2以下を占有する。
 被度：2 = 被度が 1/10以上～1/4以下を占有する。
 被度：1 = 被度が1/10以下を占有する。
 被度：+ = 少数で被度は低い。

優占度：5 優占度：4 優占度：3 優占度：2 優占度：1

(群度) = 各植物の方形区内での群がりの状態
 群度：5 = カ-ベット状に分布する。
 群度：4 = カ-ベットに穴があいている状態。
 群度：3 = 大きな斑を形成あるいはまだら状。
 群度：2 = 斑状に分布する。
 群度：1 = 小群状あるいは単独に分布する。

群度：5 群度：4 群度：3 群度：2 群度：1

資料：「第2回自然環境保全基礎調査」1980年 環境庁

出典：植物社会学的調査法 (Braun-Blanquet=1964) による。

植生分布状況（現存植生図）

相観に基づいて植物群落を識別するとともに凡例を作成し、その凡例に従い現地で植生の分布を地形図上（比屋根湿地1/500）に図示した。また、比屋根湿地については、各群落の境界を明確にするためDGPS、TS（誤差精度：0.1～1m）等を活用するほか、群落の高低についても可能な限り細区分し図示した。

例えば、北峠 群落(0.5m：実生株)

- 北峠 群落(0.5以上～1m未満)
- 北峠 群落(1以上～2m未満)
- 北峠 群落(2以上～3m未満)
- 北峠 群落(3以上～)

植生断面調査

比屋根湿地内は、海岸から内陸部付近へ2ラインと海岸（県道227号線）に平行な1ラインを設定し計3ラインの調査を行った。調査はクワ等を利用し比屋根湿地内部の植生状況のほか海岸背後の道路や建造物から海岸域の植生の広がり状況を植生断面図に記載すると共に草丈や樹高及び代表的な出現種等も合わせて図示した。

貴重な植物群落

以下の該当する貴重な植物群落を抽出・整理した。

- ・国指定天然記念物
- ・沖縄県指定天然記念物
- ・沖縄市指定天然記念物
- ・「第2回自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）特定植物群落調査報告書 日本重要な植物群落 南九州・沖縄版」（1980年 環境庁）での選定群落
- ・「第3回自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）特定植物群落調査報告書（追加調査・追跡調査）」（1988年 環境庁）での選定群落
- ・「植物群落レッドデータブック」（1996年（財）日本自然保護協会・（財）世界自然保護基金日本委員会）での選定種
- ・「特定植物群落選定基準」（1980年 環境庁）での選定種

(2)植物相調査

植物相

調査区域内の植物種を現地で踏査することによって記録を行い、不明な種については持ち帰り同定を行った。これらの結果に基づき維管束植物目録を作成した。なお、植物目録の作成にあたっては、主に「琉球植物目録(1994)」(初島住彦・天野鉄夫)に基づくものとした。

貴重な植物種

以下に該当する貴重な植物種を抽出した。

- ・国指定天然記念物
- ・沖縄県指定天然記念物
- ・沖縄市指定天然記念物
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成4年法第75号）での選定種
- ・「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-」（2000年 環境庁）での選定種
- ・「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータおきなわ-」（1996年 沖縄県）での選定種

6.5 調査結果

(1)植物相調査

植物相

比屋根湿地全域で確認した植物種は、表6-1に示したとおり、25目34科66種であった。なお、維管束植物目録は、表6-3に示した。

確認した植物種25目34科66種のうち表6-2に示したとおり、自生種が23目31科55種、帰化種及び栽培逸出種が7目8科11種であった。全出現種に占める帰化種及び栽培逸出種の割合は、16.7%であった。

表6-1 出現種の分類群毎の数

		区分		目・科・種	
植物	種	シダ		0・0・0	
		裸子		0・0・0	
		被子	双子葉類	離弁花	15・20・38
				合弁花	5・9・17
			単子葉類		5・5・11
計				25・34・66	

表6-2 自生種及び帰化種・栽培逸出種

		区分		自生種	帰化種及び栽培逸出種	合計	
				目・科・種	目・科・種	目・科・種	
植物	種	シダ		0・0・0	0・0・0	0・0・0	
		裸子		0・0・0	0・0・0	0・0・0	
		被子	双子葉類	離弁花	14・19・36	2・2・2	15・20・38
				合弁花	5・8・11	2・3・6	5・9・17
			単子葉類		4・4・8	3・3・3	5・5・11
計				23・31・55	7・8・11	25・34・66	
全体に占める割合(%)				83.3	16.7	100	

表6-3 維管束植物目録

通し No.	目名	科名	種名	1)在来種及び帰化種等		2)貴重種		
				種の保存	環境省	沖縄県	希少	準
種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱 離弁花亜綱								
1	イヌササ	ササ科	イヌササ	×				
2	イヌササ	ササ科	イヌササ					
3	イヌササ	ササ科	イヌササ					
4								
5								
6								
7								
8	アマノハ	アマノハ科	アマノハ					
9	アマノハ	アマノハ科	アマノハ					
10								
11	アマノハ	アマノハ科	アマノハ					
12	アマノハ	アマノハ科	アマノハ					
13								
14	アマノハ	アマノハ科	アマノハ					
15	アマノハ	アマノハ科	アマノハ					
16	アマノハ	アマノハ科	アマノハ					
17	アマノハ	アマノハ科	アマノハ					
18	アマノハ	アマノハ科	アマノハ					
19	アマノハ	アマノハ科	アマノハ					
20	アマノハ	アマノハ科	アマノハ					
21								
22								
23								
24	ミカン	ミカン科	ミカン					
25								
26								
27								
28								
29	ニシキギ	ニシキギ科	ニシキギ					
30								
31	クワ	クワ科	クワ					希少
32	アオイ	アオイ科	アオイ					
33	オトギリシ	オトギリシ科	オトギリシ					
34	アトモ	アトモ科	アトモ					
35								
36								
37	サトウ	サトウ科	サトウ					
38	サトウ	サトウ科	サトウ					
種子植物門 被子植物亜門 双子葉植物綱 合弁花亜綱								
39	サトウ	サトウ科	サトウ					
40	サトウ	サトウ科	サトウ					
41	サトウ	サトウ科	サトウ					
42	サトウ	サトウ科	サトウ					
43								
44								
45	サトウ	サトウ科	サトウ					
46	サトウ	サトウ科	サトウ					
47								
48								
49	サトウ	サトウ科	サトウ					
50	サトウ	サトウ科	サトウ					
51	サトウ	サトウ科	サトウ					
52								
53								
54								
55								
種子植物門 被子植物亜門 単子葉植物綱								
56	サトウ	サトウ科	サトウ					
57	サトウ	サトウ科	サトウ					
58								
59								
60								
61								
62								
63	サトウ	サトウ科	サトウ					
64								
65	サトウ	サトウ科	サトウ					
66	サトウ	サトウ科	サトウ					
計	25目	34科	66種			2種	1種	

配列は主に「琉球植物目録(1994)」初島任彦・天野鉄夫(沖縄生物学会)に従い作成した。

注1)表中、備考欄の「在来種及び帰化植物等」は、
 注2)表中、備考欄の「貴重種」は、以下に示した。
 1.種の保存:「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年法律75号)
 国内 国内希少野生動植物種(本邦に生息又は生育する絶滅のおそれのある野生動植物の種)
 国際 国際希少野生動植物種(国際的に協力して保存を図ることとされている絶滅のおそれのある野生動植物の種)
 2.環境省:「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-(2000年 環境庁)」
 A 絶滅危惧 Ⅰ類(絶滅の危機に瀕している種。ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの)
 B 絶滅危惧 Ⅱ類(絶滅の危機に瀕している種。A類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの)
 絶滅危惧 Ⅲ類(絶滅の危険が増大している種-現在の状態をもちた圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの)
 準 準絶滅危惧(存続基盤が脆弱な種-現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの)
 3.沖縄県:「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータおきなわ」(1996年 沖縄県)
 危惧 絶滅危惧種(絶滅の危機に瀕しているもの)
 危急 危急種(絶滅の危機が増大しているもの)
 希少 希少種(現在のところ「絶滅危惧種」にも「危急種」にも該当しないが、生育条件の変化によって容易に上位のランクに移行するような要素(脆弱性)を有するもの)

貴重な植物種

貴重な植物種は、表 6-4 に示したとおり、ハリツルマサキ(ニシキギ科)、リュウキュウコクタン(カキノキ科)の2種を確認した。

ハリツルマサキは、環境省のレッドデータブックで絶滅危惧 Ⅰ類、沖縄県のレッドデータおきなわで希少種に選定されている。生育を確認した地点は、いずれも地盤高1m以上の盛土箇所(比屋根第二雨水幹線の延長水路)南側の土手、トキワギョリュウ群落内や民地境界付近の地盤の高くなっている箇所であった。

リュウキュウコクタンは、環境省のレッドデータブックで準絶滅危惧に選定されており、ハリツルマサキが確認されたトキワギョリュウ群落の林内で生育していた。

いずれの種も植物愛好家などに親しまれており公園・庭・街路樹に利用され、種子散布により逸出した種も少なくない。

なお、貴重種確認地点図に代表的な植物の分布状況を併せて図 6-2 に示した。

表6-4 貴重な植物種の状況

	目名	科名	種名	指定状況					
				注1 国	注2 県	注3 沖縄市	注4 種保存	注5 環境庁	注6 沖縄県
1	ニシキギ	ニシキギ科	ハリツルマサキ					類	希少
2	サトウ	サトウ科	リュウキュウコクタン					準	
計	2目	2科	2種					2種	1種

注1. 国 : 国指定天然記念物
 注2. 県 : 沖縄県指定天然記念物
 注3. 沖縄市 : 沖縄市指定天然記念物
 注4. 種の保存: 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(平成4年法律75号)での選定種
 国内 国内希少野生動植物種(本邦に生息又は生育する絶滅のおそれのある野生動植物の種)
 国際 国際希少野生動植物種(国際的に協力して保存を図ることとされている絶滅のおそれのある野生動植物の種)
 注5. 環境庁: 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック」(2000 環境庁)での選定種
 類 絶滅危惧 Ⅰ類(絶滅の危険が増大している種)
 準 準絶滅危惧種(存続基盤が脆弱な種)
 注6. 沖縄県: 「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータおきなわ」(1996 沖縄県)での選定種
 希少 希少種



図6-2 貴重種確認地点及び植物分布状況図

(2) 植生調査

植生調査（群落組成調査）

植生調査は、比屋根湿地内に 65 地点を設けて行い、19 群落に区分した。その群落区分一覧表を表 6-5 に示した。各地点の群落組成表一覧を表 6-7、各群落組成表一覧を表 6-8 ～ に示した。

植生調査を行った結果、19 の群落について識別することができた。そのうち、在来種を優占種とする群落は、塩湿地でみられる木本類のメヒルギ群落、オヒルギ群落、ヤエヤマヒルギ群落、ヒルギ混合群落及び草本類のソナレシバ群落、ハママツナ群落、ミルスベリヒユ群落、ヨシ群落。海岸の低木林とされるオオハマボウ群落、アダン群落、イボタクサギ群落。河川等の湿地環境にみられるシマツユクサ群落。荒れ地や林縁部等でみられるススキ群落、ノアサガオ群落の 14 群落であった。

外来種を優占とする群落は、防風・防潮林として良く利用されるトキワギョリュウ（モクマオウ科）群落。栽培逸出種とされるギンネム群落、ヒイラギギク群落、パラグラス群落のほかツル SP 群落（現在同定中）の 5 群落であった。

表6-5 植生区分

区分	群落名	植生調査地点
塩湿地	a.メヒルギ群落	7.11.14.18.20.29.30.31.38.59
	b.アガヒルギ(北群)群落	19
	c.ヤエヤマヒルギ群落	54
	d.ヒルギ混合群落	3.4.12.13.15.21.23.27.55.56
	e.ソナレシバ群落	1.10.16
	f.ハママツナ群落	9
	g.ミルスベリヒユ群落	2.8
	h.ヨシ群落	5.6.22.28.33.34.36.41.42.46.60.62
海岸低木林	i.イボタクサギ群落	43.50
	j.アダン群落	45
	k.オオハマボウ群落	52
湿地	l.シマツユクサ群落	49
草地	m.ススキ群落	65
	n.ノアサガオ群落	24
樹林（栽培及び逸出）	o.トキワギョリュウ(モクマウ)群落	25
低木林（栽培逸出）	p.ギンネム群落	37
	q.ヒイラギギク群落	17.26.32.35.39.40.44.53.58.61.63
草地（帰化）	r.パラグラス群落	47.51.64
	s.ツル S P	48

塩湿地、海岸低木林、湿地、草地の群落名は優占種名で在来種である。

樹林、低木林、草地の群落名は優占種名で帰化種である。

また、各群落毎の分布面積を表 6-6 に示した。

比屋根湿地の面積は、31,371 m²となっており、県総合運動公園側のメヒルギ群落、オヒルギ群落、ヤエヤマヒルギ群落、ヒルギ混合群落のヒルギ林が最も広い面積を占め 31.1 %で、そのうちメヒルギ群落が 25.5%を占めていた。次にヨシ群落の 21.5 %、ヒイラギギク群落の 20.8 %、僅かにヒルギ類の幼木がみられた無植生域（干潟）の 13.4 %を含めると全体の 86.8 %を占めていた。

表6-6 群落毎の面積

区分	群落名	面積 (m ²)	比率 (%)
塩湿地	a.メヒルギ群落	8,008.1	25.5
	b.アガヒルギ(北群)群落	620.7	2.0
	c.ヤエヤマヒルギ群落	153.2	0.5
	d.ヒルギ混合群落	970.2	3.1
	小計	9,752.2	31.1
	e.ソナレシバ群落	317.7	1.0
	f.ハママツナ群落	150.5	0.5
	g.ミルスベリヒユ群落	79.0	0.3
海岸低木林	h.ヨシ群落	6,747.6	21.5
	i.イボタクサギ群落	1,124.3	3.6
	j.アダン群落	31.8	0.1
湿地	k.オオハマボウ群落	78.4	0.2
	l.シマツユクサ群落	31.3	0.1
草地	m.ススキ群落	87.9	0.3
	n.ノアサガオ群落	54.3	0.2
樹林（栽培及び逸出）	o.トキワギョリュウ(モクマウ)群落	829.0	2.6
低木林（栽培逸出種）	p.ギンネム群落	281.1	0.9
	q.ヒイラギギク群落	6,533.9	20.8
草地（帰化）	r.パラグラス群落	789.0	2.5
	s.ツル S P	264.3	0.8
無植生域（干潟）	計	4,219.0	13.4
		31,371.3	100.0

塩湿地、海岸低木林、湿地、草地の群落名は優占種名で在来種である。

樹林、低木林、草地の群落名は優占種名で帰化種である。

無植生域（干潟）と区分したが一部で僅かにヒルギ類の実生等がみられる。

群落区分を行った19群落について各群落毎の概要を以下に示した。

- a. メヒルギ群落 「調査地点： 7、11、14、18、20、29、30、38、59の10地点」
河口の感潮域や内湾の最奥部などの塩泥湿地に成立する群落で、比屋根湿地の比屋根第二雨水幹線延長水路から南側の県総合運動公園側に分布がみられた。ヒルギ類として他にオヒルギ群落、ヤエヤマヒルギ群落、これらの混合群落を区分したが、ヒルギの分布の中で最も広い面積を占めていた。
相観は、低木林と草本からなり、低木林が7地点、草本が3地点で調査を行った。低木林は、低木層と草本層に分化がみられ、樹冠部をメヒルギが優占し生育していた。
低木層の高さ 1.2 m ~ 3.9 m、植被率 50 ~ 70 %で地点の地盤高によりアカバナヒルギ(オヒルギ)、ヒイラギギク、ヨシなども生育する場所があった。
草本層の高さ 0.3 m ~ 0.7 m、植被率 5 % ~ 90 %でメヒルギやアカバナヒルギ(オヒルギ)の幼樹、ソナレシバ、ミルスベリヒユ、ハママツナなどの草本類が所によりみられた。
また、草本は高さ 0.25 m ~ 0.9 m、植被率 80 % ~ 100 %でメヒルギが樹冠部を構成しておりソナレシバの被度の高い地点がみられたほかハママツナ、ミルスベリヒユなどが生育していた。
- b. アカバナヒルギ(オヒルギ)群落 「調査地点： 19の1地点」
メヒルギ同様、河口の感潮域や内湾の最奥部などの塩泥湿地に成立する群落で、比屋根湿地の比屋根第二雨水幹線延長水路から南側の県総合運動公園側に分布がみられた。
低木林で低木層と草本層に分化がみられ、低木層の高さ 3.8 m、植被率 90 %、草本層の高さ 1 m、植被率 70 %でいずれの階層もアカバナヒルギ(オヒルギ)のみが生育していた。
- c. ヤエヤマヒルギ群落 「調査地点： 54の1地点」
メヒルギ同様、河口の感潮域や内湾の最奥部などの塩泥湿地に成立する群落で、比屋根湿地の比屋根第二雨水幹線延長水路から南側の県総合運動公園側に分布がみられた。
低木林で低木層(第一、第二)と草本層に分化がみられ、第一低木層の高さ 4.7 m、植被率 40 %でヤエヤマヒルギのみが出現した。第二低木層の高さ 3.6 m、植被率 70 %でヤエヤマヒルギが優占するほかメヒルギ、アカバナヒルギ(オヒルギ)がみられた。草本層の高さ 0.6 m、植被率 5 %と低く上木層の幼樹がみられた。
- d. ヒルギ混合群落 「調査地点： 3、4、12、13、15、21、23、27、55、56の10地点」
樹冠にメヒルギ、アカバナヒルギ(オヒルギ)、ヤエヤマヒルギが混在し、区分が明確でない林分をヒルギ混合群落として取り扱った。

- 低木林であり低木層(第一、第二)と草本層(第一、第二)に分化が認められた。
第一低木層の高さ 2.3 m ~ 5.3 m、植被率 45 % ~ 80 %でメヒルギ、アカバナヒルギ(オヒルギ)のほかヤエヤマヒルギなどが生育していた。
第二低木層の高さ 1.2 m ~ 3.4 m、植被率 30 % ~ 100 %でアカバナヒルギ(オヒルギ)やメヒルギが生育していた。
第一草本層の高さ 1 m、植被率 15 % ~ 100 %でアカバナヒルギ(オヒルギ)、メヒルギなどが生育していた。
第二草本層の高さ 0.3 m ~ 0.8 m、植被率 5 % ~ 30 %で上木層の幼樹のほか草本類のソナレシバ、ハママツナ、ミルスベリヒユが生育する場所がみられた。
- e. ソナレシバ群落 「調査地点： 1、10、16の3地点」
海岸などの感潮域に成立する群落でヒルギ林のやや陸地化した砂礫地や泥湿地で小規模あるいは帯状の分布がみられた。
草本層の1階層で高さ 0.35 m ~ 0.5 m、植被率 90 ~ 100 %でソナレシバが高い被度を示し、ハママツナ、シロミルスベリヒユ、ミルスベリヒユ、イソテンツキが生育していた。
- f. ハママツナ群落 「調査地点： 9の1地点」
ソナレシバ同様に海岸などの感潮域に成立する群落でヒルギ林のやや陸地化した砂礫地や泥湿地で小規模あるいは帯状の分布がみられた。
草本層の1階層で高さ 0.45 m、植被率 70 %でハママツナが高い被度を示し、ソナレシバ、ミルスベリヒユがわずかであるが出現した。
- g. ミルスベリヒユ群落 「調査地点： 2、8の2地点」
ソナレシバ同様に海岸などの感潮域に成立する群落でヒルギ林のやや陸地化した砂礫地や泥湿地で小規模あるいは帯状の分布がみられた。
草本層の1階層で高さ 0.35 m ~ 0.8 m、植被率 70 % ~ 100 %で草本類のミルスベリヒユが優占し出現したほか、ソナレシバ、ハママツナ、シロミルスベリヒユ、オオアレチノギク、木本類のメヒルギの実生が生育していた。
- h. ヨシ群落 「調査地点： 5、6、22、28、33、34、36、41、42、57、60、62の12地点」
海岸平野に多く分布し、淡水性及び汽水性の湿地に群落を形成している。比屋根第二雨水幹線延長水路付近から北側の市街地側に分布する。
草本層の第一草本と第二草本の2階層に分化がみられ、地盤高の違いにより第二草本層の生育種に違いが認められる。
第一草本層の高さ 1.3 m ~ 2.0 m、植被率 20 % ~ 70 %で草本類のヨシが優占した。
第二草本層の高さ 0.4 m ~ 1.2 m、植被率 1 % ~ 100 %で地点によりハママツナ、ハイキビ、サワズメノヒエ、ソナレシバなどがそれぞれ優占する。そのほかに、

草本類のミルスベリヒユ、ヨシ、オオアレチノギク、木本類のヒイラギギク、メヒルギ、アカバナヒルギ（オヒルギ）、イボタクサギなどがわずかに出現した。

- i. イボタクサギ群落 「調査地点： 43、46、50の3地点」
海岸平野に多く分布し、淡水性及び汽水性の湿地に群落を形成している。比屋根湿地の北側に中規模に分布しており、低木と草本に区別され、低木は低木層の1階層、草本は第一草本、第二草本の2階層に分化がみられた。
低木層の高さ 3.8 m、植被率 100 %でイボタクサギが高被度に生育し、栽培逸出種であるツルSPが広がるほかヨシがわずかにみられた。
草本層の第一草本では高さ 1.9 m ~ 2.1 m、植被率 5 % ~ 20 %とやや低く、ヨシがみられるほか、わずかに栽培逸出種であるモミジバヒルガオが生育していた。
- j. アダン群落 「調査地点： 45の1地点」
主に海岸の安定した砂地に群落を形成し海岸線に分布する。比屋根湿地の北側にわずかであるが小規模に分布していた。
低木層の1階層でアダンのほか、ツル生植物のモミジバヒルガオ、ツルsp、いね科のヨシが生育していた。
- k. オオハマボウ群落 「調査地点： 52の1地点」
海岸の安定した砂浜や河川沿いなどに分布し、比屋根湿地の北側にわずかであるが小規模に分布がみられた。
低木層と草本層（第一草本、第二草本）に分化し、5種が出現した。
低木層の高さ 4 m、植被率 80 %でオオハマボウが優占するほか、栽培逸出種のモミジバヒルガオ、イネ科植物のヨシがわずかに生育していた。
第一草本層の高さ 1.8 m、植被率 20 %でヨシがやや優占したほかモミジバヒルガオ、オオハマボウがわずかに出現した。
第二草本層の高さ 0.8 m、植被率 5 %と低く、ヨシ、ヒイラギギク、モミジバヒルガオ、ヤマグワが出現した。
- l. シマツユクサ群落 「調査地点： 49の1地点」
河川沿いや淡水性の湿地に群落を形成する機会が多く、比屋根湿地の北側側溝開口部付近で小規模の分布がみられた。
第一草本層と第二草本層の分化がみられ、第一草本層の高さ 1.3 m、植被率 10 %でヨシや栽培逸出種のパラグラスがわずかに生育していた。
第二草本層の高さ 0.6 m、植被率 100 %でシマツユクサが高被度に優占するほかノアサガオ、つるsp、パラグラス、ヨシ、イボタクサギがわずかに出現した。
- m. ススキ群落 「調査地点： 65の1地点」
海岸から山地の空き地や放棄畑に侵入する遷移途中段階の群落で比屋根湿地では浚渫土砂で盛土となった場所にわずかであるが帯状の分布がみられた。

第一草本層の高さ 2.3 m、植被率 90 %でススキが高被度に生育していた。
第二草本層の高さ 1 m、植被率 1 %程度でヒイラギギク、ハイシロノセンダングサがわずかであるが生育していた。

- n. ノアサガオ群落 「調査地点： 24の1地点」
海岸近くから山地の林縁部や路傍などに群落がみられ、比屋根湿地のオヒルギ群落背後から道路の擁壁間にある地盤の高くなった所にマント状に生育していた。
草本層の1階層で高さ 1.3 m、植被率 100 %でノアサガオが高被度に優占するほかパラグラス、ヨシがわずかに出現した。
- o. トキワギョリュウ(モクマオウ)群落 「調査地点： 25の1地点」
砂防・防風などの利用目的で導入された植物で比屋根湿地の北側にある陸地化が最も進んだ場所に生育していた。
比屋根湿地の中で最も樹高が高く高木林で4階層に分化がみられた。
高木層の高さ 14 m、植被率 50 %でトキワギョリュウ(モクマオウ)の1種で占めていた。
亜高木層の高さ 10 m、植被率 15 %でトキワギョリュウ(モクマオウ)のほかモミジバヒルガオがわずかに出現した。
低木層の高さ 5 m、植被率 70 %でギンネムが高被度に出現したほかモミジバヒルガオ、ゲッキツ、アカテツがわずかにみられた。
草本層の高さ 1.7 m、植被率 75 %でゲッキツが高被度に出現しヤマグワ、インドシャリンバイ、リュウキュウコクタン、ゲットウなど18種が出現した。
- p. ギンネム群落 「調査地点： 37の1地点」
緑肥植物として導入された種であるが野生化し各地に分布がみられる。比屋根湿地北側の宅地境界にある擁壁付近やトキワギョリュウ(モクマオウ)群落の林縁でわずかであるが分布がみられた。
低木林で低木層と草本層の2階層に分化がみられ11種が出現した。
低木層の高さ 4.3 m、植被率 80 %でギンネムが高被度で出現し、ヤマグワ、パラグラス、モミジバヒルガオなどが出現した。
草本層の高さ 1.5 m、植被率 100 %でパラグラスが高被度で出現したほかイボタクサギ、ヤマグワ、モミジバヒルガオ、ゲッキツ、ギンネム、ハリツルマサキ、フクマンギが出現した。
- q. ヒイラギギク群落 「調査地点： 17、26、32、35、39、40、44、53、58、61、63の11地点」
ヒイラギギクは栽培逸出種で比屋根湿地の中に生育地を拡大しつつある。草本層の第一草本及び第二草本に分化がみられ、2~4種が出現した。
第一草本層の高さ 1.2 m ~ 3.2 m、植被率 10 % ~ 100 %でヒイラギギクが高被度に出現し、ヨシ、ハマツナ、モミジバヒルガオ、イボタクサギが生育していた。

第二草本層の高さ 0.4 m ~ 1.5 m、植被率 5 % ~ 100 % でヒイラギギクのほかヨシ、ソナレシバ、イボタクサギ、モミジバヒルガオ、シロノセンダングサ、サワズメノヒエが出現した。

r. パラグラス群落 「調査地点： 47、51、64の3地点」

牧草として導入されたが河川や湿地などに野生化している。比屋根湿地の西側の道路擁壁付近の盛土部分に分布がみられ、草本層の第一草本層及び第二草本層に分化がみられる。

第一草本層の高さ 1.8 m ~ 2.3 m、植被率 50 % ~ 100 % でパラグラスが優占し、ヨシ、モミジバヒルガオ、ツル s p、ノアサガオ、シロノセンダングサが出現した。

第二草本層の高さ 0.8 m、植被率 30 % ~ 90 % でパラグラスが出現したほかシロノセンダングサ、ヨシ、モミジバヒルガオ、ノアサガオ、ツル s p、シマツユクサ、シュロガヤツリがみられた。

s. ツル S P 群落 「調査地点： 48の1地点」

栽培逸出種であるが現在同定中である。比屋根湿地の北側の側溝開口付近にみられマント状に分布する。

草本層の第一草本層及び第二草本層に分化がみられる。

第一草本層の高さ 1.6 m、植被率 10 % でツル s p とヨシがわずかに生育する。

第二草本層の高さ 0.9 m、植被率 80 % でツル s p が高被度に出現するほかイボタクサギ、シマツユクサがわずかに生育する。

表6-8 群落組成表(i.イボタクサギ群落)

地区名	i			出現回数	
調査区番号	()	43	46		50
調査日	()	8/24	8/24	8/24	
海拔	(m)	1.00	1.07	1.11	
方位	()	-	-	-	
傾斜角度	(°)	-	-	-	
調査区面積	(m ²)	9	9	25	
低木層(S)の高さ	(m)	・	・	3.8	
低木層(S)の植被率	(%)	・	・	100	
低木層(S)の出現数	(種)	・	・	3	
草本層(H-)の高さ	(m)	2.1	1.9	・	
草本層(H-)の植被率	(%)	20	5	・	
草本層(H-)の出現数	(種)	1	2	・	
草本層(H-)の高さ	(m)	1.4	1.3	・	
草本層(H-)の植被率	(%)	90	100	・	
草本層(H-)の出現数	(種)	2	5	・	
出現種数	(種)	3	5	3	
低木層(S)					
S.1 依'タサキ		・	・	5.5	1
S.2 ヲクsp		・	・	2.2	1
S.3 ヲシ		・	・	+2	1
草本層(H-)					
H-.4 ヲシ		2.2	+2	・	2
H-.5 モシ'ハ'ヒルガオ		・	+	・	1
草本層(H-)					
H-.6 依'タサキ		4.4	2.2	・	2
H-.7 ハヤシ		2.2	3.3	・	2
H-.8 モシ'ハ'ヒルガオ		・	3.3	・	1
H-.9 ヲシ		・	+2	・	1
H-.10 ヲクsp		・	+2	・	1

表6-8 群落組成表(j.アダン群落)

地区名	j	
調査区番号	()	45
調査日	()	8/24
海拔	(m)	1.01
方位	()	-
傾斜角度	(°)	-
調査区面積	(m ²)	20
低木層(S)の高さ	(m)	2.6
低木層(S)の植被率	(%)	100
低木層(S)の出現数	(種)	4
出現種数	(種)	4
低木層(S)		
S.1 アダン		4.4
S.2 モシ'ハ'ヒルガオ		2.2
S.3 ヲクsp		2.2
S.4 ヲシ		1.2

表6-8 群落組成表(o.トキワギョリュウ群落)

地区名	o	
調査区番号	()	25
調査日	()	8/22
海拔	(m)	1.30
方位	()	-
傾斜角度	(°)	-
調査区面積	(m ²)	100
高木層(T1)の高さ	(m)	14
高木層(T1)の植被率	(%)	50
高木層(T1)の出現数	(種)	1
亜高木層(T2)の高さ	(m)	10
亜高木層(T2)の植被率	(%)	15
亜高木層(T2)の出現数	(種)	2
低木層(S)の高さ	(m)	5
低木層(S)の植被率	(%)	70
低木層(S)の出現数	(種)	4
草本層(H)の高さ	(m)	1.7
草本層(H)の植被率	(%)	75
草本層(H)の出現数	(種)	18
出現種数	(種)	20
高木層(T1)		
T1.1 トキワ'ヨリュウ		3.4
亜高木層(T2)		
T2.2 トキワ'ヨリュウ		2.3
T2.3 モシ'ハ'ヒルガオ		+
低木層(S)		
S.4 キンネム		4.4
S.5 モシ'ハ'ヒルガオ		+
S.6 ゲ'ツキ		+
S.7 アカテツ		+
草本層(H)		
H.8 ゲ'ツキ		4.4
H.9 ヤマ'グ'リ		1.2
H.10 イ'ン'シ'リ'ハ'イ		+2
H.11 リ'ウ'キ'ウ'コ'ク'ク'ン		+2
H.12 ゲ'ツキ		+2
H.13 ヲシ		+
H.14 ヒ'イ'キ'ギ'ク		+
H.15 モシ'ハ'ヒルガオ		+
H.16 依'タサキ		+
H.17 キンネム		+
H.18 ハ'リ'ツ'ル'マ'サ'キ		+
H.19 シ'ロ'シ'ン'ダ'ン'グ'サ		+
H.20 ヲクsp		+
H.21 シ'マ'ヤ'シ'ハ'ツ		+
H.22 ネ'ミ'チ		+
H.23 フ'ク'キ		+
H.24 マ'サ'キ		+
H.25 モ'シ'タ'サ'キ		+

表6-8 群落組成表(p.ギンネム群落)

地区名	p	
調査区番号	()	37
調査日	()	8/24
海拔	(m)	1.95
方位	()	-
傾斜角度	(°)	-
調査区面積	(m ²)	15
低木層(S)の高さ	(m)	4.3
低木層(S)の植被率	(%)	80
低木層(S)の出現数	(種)	8
草本層(H)の高さ	(m)	1.5
草本層(H)の植被率	(%)	100
草本層(H)の出現数	(種)	8
出現種数	(種)	11
低木層(S)		
S.1 キンネム		4.4
S.2 ヤマ'グ'リ		2.2
S.3 ハ'ラ'グ'ラ'ス		1.2
S.4 モシ'ハ'ヒルガオ		+2
S.5 依'タサキ		+2
S.6 ア'サ'ガ'オ		+
S.7 依'タサキ		+
S.8 ヲクsp		+
草本層(H)		
H.9 ハ'ラ'グ'ラ'ス		4.4
H.10 依'タサキ		2.2
H.11 ヤマ'グ'リ		1.2
H.12 モシ'ハ'ヒルガオ		+2
H.13 ゲ'ツキ		+2
H.14 キンネム		+2
H.15 ハ'リ'ツ'ル'マ'サ'キ		+
H.16 フ'ク'キ		+

表6-8 群落組成表(k.オオハマボウ群落)

地区名	k	
調査区番号	()	52
調査日	()	8/24
海拔	(m)	0.99
方位	()	-
傾斜角度	(°)	-
調査区面積	(m ²)	25
低木層(S)の高さ	(m)	4.0
低木層(S)の植被率	(%)	80
低木層(S)の出現数	(種)	3
草本層(H-)の高さ	(m)	1.8
草本層(H-)の植被率	(%)	20
草本層(H-)の出現数	(種)	3
草本層(H-)の高さ	(m)	0.8
草本層(H-)の植被率	(%)	5
草本層(H-)の出現数	(種)	4
出現種数	(種)	5
低木層(S-)		
S.1 オオハマ'ウ		5.5
S.2 モシ'ハ'ヒルガオ		+2
S.3 ヲシ		+
草本層(H-)		
H.4 ヲシ		2.2
H.5 モシ'ハ'ヒルガオ		+
H.6 オオハマ'ウ		+
草本層(H-)		
H.7 ヲシ		+
H.8 ヒ'イ'キ'ギ'ク		+
H.9 モシ'ハ'ヒルガオ		+
H.10 ヤマ'グ'リ		+

表6-8 群落組成表(l.シマツユクサ群落)

地区名	l	
調査区番号	()	49
調査日	()	8/24
海拔	(m)	1.22
方位	()	-
傾斜角度	(°)	-
調査区面積	(m ²)	9
草本層(H-)の高さ	(m)	1.3
草本層(H-)の植被率	(%)	10
草本層(H-)の出現数	(種)	2
草本層(H-)の高さ	(m)	0.6
草本層(H-)の植被率	(%)	100
草本層(H-)の出現数	(種)	6
出現種数	(種)	6
草本層(H-)		
H-.1 ヲシ		1.2
H-.2 ハ'ラ'グ'ラ'ス		+2
草本層(H-)		
H-.3 シ'マ'ツ'ユ'ク'サ		5.5
H-.4 ア'サ'ガ'オ		1.2
H-.5 ヲクsp		+2
H-.6 ハ'ラ'グ'ラ'ス		+2
H-.7 ヲシ		+
H-.8 依'タサキ		+

表6-8 群落組成表(q.ヒイラギギク群落)

地区名	q												出現回数
調査区番号	()	17	26	32	35	39	40	44	53	58	61	63	
調査日	()	8/17	8/23	8/23	8/23	8/24	8/24	8/24	8/24	8/30	8/30	8/30	
海拔	(m)	0.98	0.77	0.86	0.90	0.92	0.95	1.01	0.97	0.89	1.20	0.91	
方位	()	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
傾斜角度	(°)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
調査区面積	(m ²)	4	4	9	4	9	9	9	9	9	9	9	
草本層(H-)の高さ	(m)	1.5	1.2	1.8	1.2	2.1	1.9	3.2	2.0	2.6	1.9	2.1	
草本層(H-)の植被率	(%)	70	80	90	90	100	100	100	10	100	90	80	
草本層(H-)の出現数	(種)	1	4	3	3	2	2	4	1	2	2	2	
草本層(H-)の高さ	(m)	0.4	・	・	0.6	・	・	0.8	1.5	1.0	・	1.0	
草本層(H-)の植被率	(%)	5	・	・	5	・	・	20	100	5	・	10	
草本層(H-)の出現数	(種)	1	・	・	2	・	・	4	3	2	・	1	
出現種数	(種)	2	4	3	3	2	2	4	3	3	2	2	
草本層(H-)													
H-.1 ヒ'イ'キ'ギ'ク		4.4	・	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5	・	4.4	5.5	4.4	9
H-.2 ヲシ		・	・	+2	+2	+2	+	+2	1.2	2.2	+2	2.2	9
H-.3 ハ'マ'ツ'サ		・	・	+	+	・	・	・	・	・	・	・	2
H-.4 モシ'ハ'ヒルガオ		・	・	・	・	・	・	+2	・	・	・	・	1
H-.5 依'タサキ		・	・	・	・	・	・	+2	・	・	・	・	1
草本層(H-)													
H-.6 ヒ'イ'キ'ギ'ク		・	4.4	・	+2	・	・	1.2	4.4	+2	・	1.2	6
H-.7 ヲシ		・	+2	・	・	・	・	+2	+	・	・	・	3
H-.8 ヲシ		+2	2.2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	2
H-.9 ハ'マ'ツ'サ		・	+2	・	+2	・	・	・	・	・	・	・	2
H-.10 依'タサキ		・	・	・	・	・	・	1.2	3.3	・	・	・	2
H-.11 モシ'ハ'ヒルガオ		・	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・	1
H-.12 シ'ロ'シ'ン'ダ'ン'グ'サ		・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
H-.13 ヲクsp		・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	1

表6-8 群落組成表(m.ススキ群落)

地区名	m	
調査区番号	()	65
調査日	()	9/12
海拔	(m)	1.47
方位	()	SW
傾斜角度	(°)	10
調査区面積	(m ²)	6
草本層(H-)の高さ	(m)	2.3
草本層(H-)の植被率	(%)	90
草本層(H-)の出現数	(種)	1
草本層(H-)の高さ	(m)	1.5
草本層(H-)の植被率	(%)	1
草本層(H-)の出現数	(種)	2
出現種数	(種)	3
草本層(H-)		
H-.1 ス'シ'キ		5.5
草本層(H-)		
H-.1 ヒ'イ'キ'ギ'ク		+2
H-.2 ハ'シ'ロ'シ'ン'ダ'ン'グ'サ		+2

表6-8 群落組成表(n.ノアサガオ群落)

地区名	n	
調査区番号	()	24
調査日	()	8/18
海拔	(m)	0.96
方位	()	-
傾斜角度	(°)	-
調査区面積	(m ²)	4
草本層(H)の高さ	(m)	1.3
草本層(H)の植被率	(%)	100
草本層(H)の出現数	(種)	3
出現種数	(種)	3
草本層(H)		
H.1 ノ'ア'サ'ガ'オ		4.4
H.2 ハ'ラ'グ'ラ'ス		2.2
H.3 ヲシ		+

表6-8 群落組成表(r.パラグラス群落)

地区名	r			出現回数
	47	51	64	
調査区番号 ()	47	51	64	
調査日	8/24	8/24	8/30	
海拔 (m)	1.28	1.10	0.31	
方位	-	-	-	
傾斜角度 (°)	-	-	-	
調査区面積 (㎡)	9	9	9	
草本層(H-)の高度 (m)	2.3	2.3	1.8	
草本層(H-)の植被率 (%)	70	70	50	
草本層(H-)の出現数 (種)	5	3	3	
草本層(H-)の高度 (m)	0.8	0.8	0.8	
草本層(H-)の植被率 (%)	80	30	90	
草本層(H-)の出現数 (種)	5	5	2	
出現種数 (種)	6	5	3	
草本層(H-)				
H-.1 パラグラス	3・3	3・3	3・3	3
H-.2 ヨシ	2・2	3・3	1・2	3
H-.3 モミジハハルガオ	.	+2	+	2
H-.4 ツルsp	+2	.	.	1
H-.5 ノアサガオ	+	.	.	1
H-.6 シロハシタナグサ	+	.	.	1
草本層(H-)				
H-.7 パラグラス	1・2	2・2	5・5	3
H-.8 シロハシタナグサ	3・3	1・2	.	2
H-.9 ヨシ	.	1・2	+	2
H-.10 モミジハハルガオ	.	+	.	1
H-.11 ノアサガオ	2・2	.	.	1
H-.12 ツルsp	+2	.	.	1
H-.13 シマユクサ	+	+	.	1
H-.14 シロガヤツリ	.	+	.	1

表6-8 群落組成表(s.ツルsp)

地区名	s
調査区番号 ()	48
調査日	8/24
海拔 (m)	0.64
方位	-
傾斜角度 (°)	-
調査区面積 (㎡)	9
草本層(H-)の高度 (m)	1.6
草本層(H-)の植被率 (%)	10
草本層(H-)の出現数 (種)	2
草本層(H-)の高度 (m)	0.9
草本層(H-)の植被率 (%)	80
草本層(H-)の出現数 (種)	4
出現種数 (種)	4
草本層(H-)	
H-.1 ツルsp	1・2
H-.2 ヨシ	+2
草本層(H-)	
H-.3 ツルsp	5・5
H-.4 休タカサ	+2
H-.5 シマユクサ	+

植生分布状況(現存植生図)

現存植生図を図6-3に示した。

比屋根湿地は、南側の運動公園側に干潟がみられ地盤が低い傾向にあるが北側の市街地側に行くに従い地盤がやや高くなっている。また、比屋根湿地の中あたりを県営比屋根団地の南側を流下する比屋根第二雨水幹線の延長水路が直線的に掘られ、その浚渫土砂が水路脇南側に盛土されている。

植生の分布状況は、運動公園側の干潟周辺部にマングローブ林を構成するメヒルギ群落、オヒルギ群落、ヤエヤマヒルギ群落、ヒルギ混合群落の分布がみられ、所々に存在する土砂の堆積した場所にソナレシバ群落、ハママツナ群落、ミルスベリヒコ群落、ヨシ群落などが帯状あるいは小群状に分布する。また、マングローブ林背後のやや陸地化が進行した地域から水路脇の盛土部分にヨシ群落、ヒイラギギク群落のほか、帯状に残る水路にヒルギ群落がみられる。

延長水路から北側は、ヨシ群落とヒイラギギク群落の分布が広範囲にみられるほか海岸林を形成するアダン群落、オオハマボウ群落、イボタクサギ群落などの進入がみられ、さらに標高1m以上の地盤上にパラグラス群落、ギンネム群落、トキワギョリュウ群落などが分布していた。

③植生分布状況（ヒルギ類樹高区分図）

比屋根湿地に分布するヒルギ類の生育状況を把握するため樹高区分等の調査を行った。その結果一覧を表 6-9、表 6-10、ヒルギ類の生育状況断面（1m × 1m）を図 6-4 ①～③にメヒルギ、図 6-5 にオヒルギ、図 6-6 にヤエヤマヒルギ、図 6-7 にヒルギ類混合を示した。また、現存植生図にヒルギ類の樹高区分を加えたものを図 6-8 に図示した。

ヒルギ類の樹高等区分調査は、優占種の違いからメヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギのほかこれらが混合して生育するヒルギ混合群落を区分し、56 地点 /（1m × 1m）で行った。

メヒルギは分布面積が最も広いことから調査枠 40 地点を設け行った結果、樹高 0.7 ～ 5.4 m（平均 2.8 m）、本数 1 ～ 26 本（平均 5.2 本）、直径 0.4 ～ 16.2cm（平均 4.7cm）を計測した。地盤高は 0.30 ～ 0.83 m（平均 0.69 m）であった。

オヒルギは調査枠 6 地点で樹高 2.9 ～ 4 m（平均 3.5 m）、本数 2 ～ 5 本（平均 3.7 本）、直径 1.8 ～ 7.8cm（平均 5.2cm）、地盤高 0.48 ～ 0.75 m（平均 0.63 m）であった。

ヤエヤマヒルギは調査枠 3 地点で樹高 3.6 ～ 4.5 m（平均 4.2 m）、本数 1 ～ 7 本（平均 3.3 本）、直径 2.3 ～ 6.7cm（平均 5.1cm）、地盤高 0.45 ～ 0.72 m（平均 0.6 m）であった。

ヒルギ混合群落は調査枠 7 地点で樹高 1.9 ～ 3.4 m（平均 2.5 m）、本数 5 ～ 18 本（平均 13 本）、直径 0.9 ～ 7cm（平均 2.3cm）、地盤高 0.56 ～ 0.79 m（平均 0.69 m）であった。

これより、平均樹高で最も高いのはヤエヤマヒルギの 4.2 m、次にオヒルギの 3.5m、メヒルギの 2.8 m、ヒルギ混合林の 2.5 m となった。平均本数では樹高の低いヒルギ混合林が 13 本と最も多く、次にメヒルギの 5.2 本、オヒルギの 3.7 本、最も樹高が高かったヤエヤマヒルギが 3.3 本となった。平均直径ではオヒルギが 5.2cm、ヤエヤマヒルギが 5.1cm、メヒルギが 4.7cm、ヒルギ混合林が 2.3cm となった。平均地盤高はいずれも 0.6 ～ 0.7 m の範囲内であった。

表6-9 ヒルギ類樹高等及び平均

（各調査枠は 1m × 1m）

No.	ヒルギ類	地盤高 (標高 m)	樹高 (m)	本数 (本)	直径 cm (地上 0.5m)
1	メヒルギ	0.3 ～ 0.83 (0.69)	0.7 ～ 5.4 (2.8)	1 ～ 26 (5.2)	0.4 ～ 16.2 (4.7)
2	オヒルギ	0.48 ～ 0.75 (0.63)	2.9 ～ 4.0 (3.5)	2 ～ 5 (3.7)	1.8 ～ 7.8 (5.2)
3	ヤエヤマヒルギ	0.45 ～ 0.72 (0.60)	3.6 ～ 4.5 (4.2)	1 ～ 7 (3.3)	2.3 ～ 6.7 (5.1)
4	ヒルギ混合林	0.56 ～ 0.79 (0.69)	1.9 ～ 3.4 (2.5)	5 ～ 18 (13)	0.9 ～ 7 (2.3)

※表中データ（数値）は、平均を表す。

表6-10 ヒルギ類樹高等調査結果一覧表

調査面積（1m × 1m）

通しNo.	相観（群落名）	地盤高 (m)	樹高 (m)	本数 (本)	直径 (cm)	(平均)	備考 (調査地St.)
1	メヒルギ	0.63	0.7	26	0.5以下	0.5	14
2	メヒルギ	0.76	0.9	4	2.6 ～ 4.9	2.9	48
3	メヒルギ	0.76	1	9	1 ～ 3.9	2.4	52
4	メヒルギ	0.45	1.1	11	0.4 ～ 10.8	3.3	11
5	メヒルギ	0.72	1.2	3	3.7 ～ 4.2	4	40
6	メヒルギ	0.76	1.5	3	1.2 ～ 2.5	2	31
7	メヒルギ	0.63	1.8	2	7.8 ～ 9.7	8.8	10
8	メヒルギ	0.73	2.2	7	2 ～ 5.5	3	32
9	メヒルギ	0.74	2.3	6	2 ～ 4.4	3.5	42
10	メヒルギ	0.69	2.4	1	3.8 ～ 3.8	3.8	23
11	メヒルギ	0.73	2.4	5	1.4 ～ 3.9	2.4	30
12	メヒルギ	0.74	2.5	3	3.9 ～ 5.5	4.7	21
13	メヒルギ	0.73	2.5	6	1.3 ～ 2.9	2.2	46
14	メヒルギ	0.8	2.6	7	1 ～ 4.4	2.8	24
15	メヒルギ	0.72	2.6	9	1.6 ～ 3.2	2.3	35
16	メヒルギ	0.57	2.7	4	3 ～ 5.7	4.7	3
17	メヒルギ	0.69	2.7	6	1.2 ～ 4.4	3	33
18	メヒルギ	0.58	2.7	2	5.8 ～ 7.8	6.8	51
19	メヒルギ	0.83	2.8	3	1.8 ～ 5.8	3.2	7
20	メヒルギ	0.74	2.8	11	1.8 ～ 3.9	2.8	41
21	メヒルギ	0.73	2.9	6	2.5 ～ 5.4	3.8	6
22	メヒルギ	0.75	2.9	5	1.9 ～ 4.6	3.7	15
23	メヒルギ	0.7	2.9	6	2.3 ～ 8.8	5.5	18
24	メヒルギ	0.7	2.9	3	3.2 ～ 5.8	4.1	19
25	メヒルギ	0.3	3.1	3	8.3 ～ 14.4	10.4	38
26	メヒルギ	0.63	3.2	5	2.1 ～ 6.8	4.6	17
27	メヒルギ	0.69	3.2	3	6.7 ～ 9.4	8.1	29
28	メヒルギ	0.6	3.3	3	5.4 ～ 7	5.9	2
29	メヒルギ	0.67	3.3	5	2.8 ～ 3.2	3.1	28
30	メヒルギ	0.77	3.4	4	3.3 ～ 6.2	4.8	4
31	メヒルギ	0.72	3.4	8	1 ～ 7.4	4.1	16
32	メヒルギ	0.73	3.5	3	3.5 ～ 4.2	3.8	34
33	メヒルギ	0.75	3.6	3	3.4 ～ 6.9	4.7	20
34	メヒルギ	0.8	3.6	5	3.6 ～ 5.2	4.3	25
35	メヒルギ	0.77	3.9	1	9.5 ～ 9.5	9.5	26
36	メヒルギ	0.42	3.9	5	2.5 ～ 7.7	4.6	53
37	メヒルギ	0.72	4	3	5.3 ～ 8.8	7.5	27
38	メヒルギ	0.57	4.4	3	5 ～ 9.2	7.4	12
39	メヒルギ	0.71	5	3	7.4 ～ 16.2	11.3	5
40	メヒルギ	0.71	5.4	3	4.3 ～ 10.2	7.5	22
41	オヒルギ	0.65	2.9	3	4.5 ～ 4.8	4.6	49
42	オヒルギ	0.48	2.9	4	1.8 ～ 4.3	3.1	55
43	オヒルギ	0.54	3.4	3	6.5 ～ 7.4	7.1	56
44	オヒルギ	0.66	3.8	5	2.7 ～ 6.9	4.7	44
45	オヒルギ	0.75	3.9	5	2.5 ～ 6.9	4.6	1
46	オヒルギ	0.69	4	2	6.5 ～ 7.8	7.2	37
47	ヤエヤマヒルギ	0.64	3.6	1	6.7 ～ 6.7	6.7	54
48	ヤエヤマヒルギ	0.72	4.4	7	2.3 ～ 5	3.4	43
49	ヤエヤマヒルギ	0.45	4.5	2	4.5 ～ 5.6	5.1	9
50	ヒルギ混合	0.72	1.9	18	0.9 ～ 3	2.2	47
51	ヒルギ混合	0.79	2.1	14	1 ～ 3.6	1.8	8
52	ヒルギ混合	0.74	2.2	14	1 ～ 2.7	1.9	36
53	ヒルギ混合	0.56	2.5	13	1.3 ～ 4	2.5	39
54	ヒルギ混合	0.68	2.5	14	1 ～ 7	2.4	45
55	ヒルギ混合	0.71	2.7	13	1 ～ 3.5	2	13
56	ヒルギ混合	0.65	3.4	5	1.4 ～ 6.2	3.3	50

※表中説明

- 地盤高(m)とは、測量により確認した海拔高度である。
- 樹高(m)とは、群落内の樹冠の高さである。
- 本数(本)とは、樹冠を構成するヒルギ類の樹木本数である。
- 直径(cm)とは、地上高0.5mにおける樹幹の直径である。但し、「St. 40」のメヒルギについては地上高0.1m。

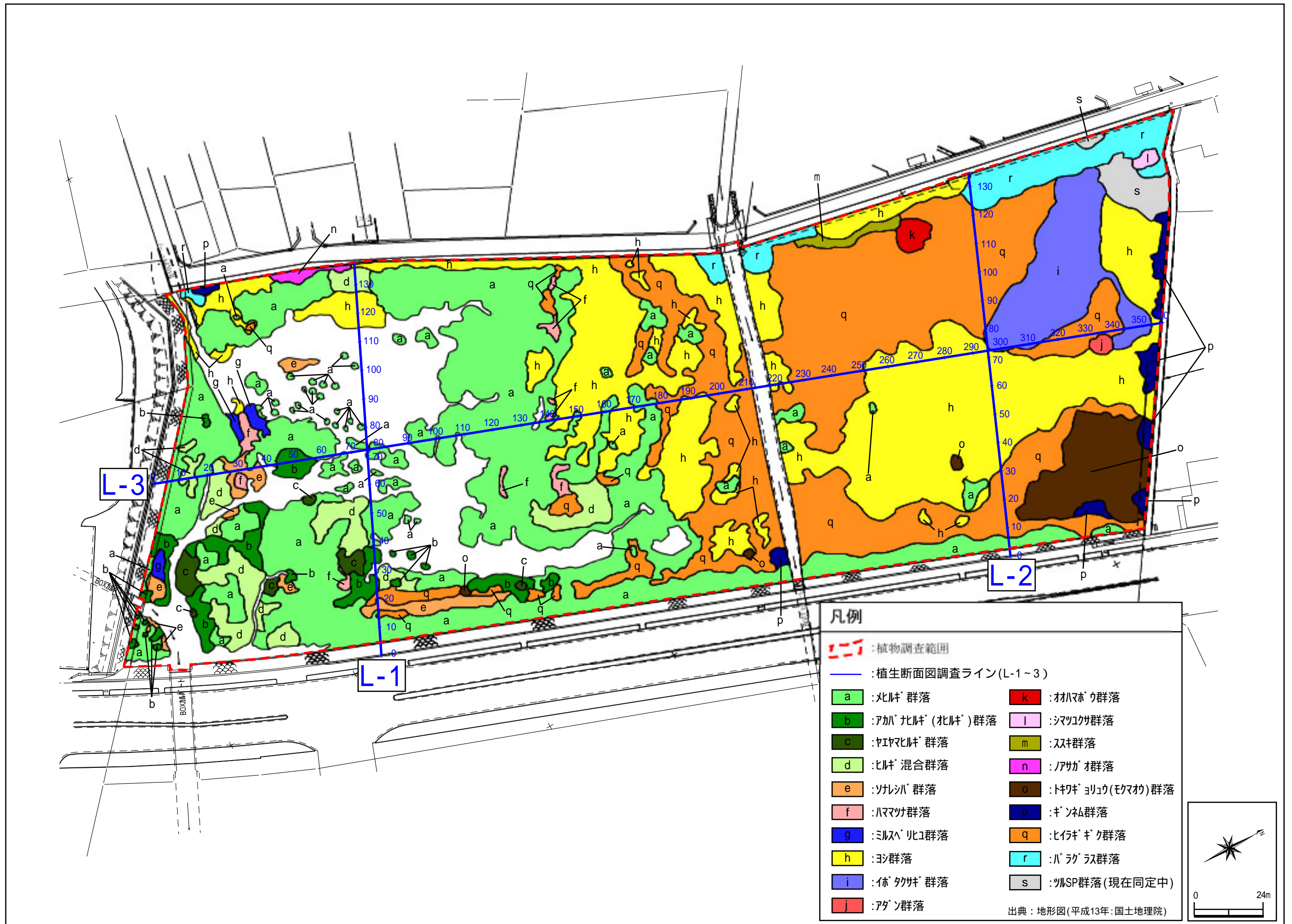


図6-3 植生分布状況(現存植生図)